



Title	上古・中古漢語における完了・パーフェクト相の表現形式の変遷 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	山田, 大輔
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12514号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/65745
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Daisuke_Yamada_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 田 大 輔

主査 准教授 松江 崇
審査委員 副査 教授 武田 雅哉
副査 教授 加藤 重広

学位論文題名

上古・中古漢語における完了・パーフェクト相の表現形式の変遷

本論文は、古代漢語におけるアスペクト表現形式の通時的変遷を論じたものである。具体的には、上古漢語（春秋戦国・前漢）から中古漢語（後漢・魏晋南北朝）にかけて、〈完了相(perfective)〉（事態を閉じた(closed)ものとしてとらえるアスペクトで、事態の類型が活動(activity)であれば〈終了〉を、達成(accomplishment)であれば〈完成〉を表す)、〈パーフェクト相(perfect)〉（参照時よりも前に発生した出来事が、参照時においても効力をもっていることを表すアスペクト）といった広義の完了アスペクトを表していた形式をとりあげ、その共時的な意味機能を分析した上で、上中古間に〈完了相〉〈パーフェクト相〉の表現形式の体系にどのような変化が生じたのかを、各時代の代表的な文献資料に基づきつつ、詳細に跡づけることを目的としたものである。現代漢語ではアスペクト範疇は十分に文法化されており、完了アスペクトを担う動詞接尾辞“了”をはじめとして、各アスペクト表現形式は、その語源を中古あるいは近古初頭（唐五代）に存在した機能語に求められるものが多い。換言すれば、上古にまで直接遡り得るものは稀少であり、上中古間に大きな変化が生じたことが予想されるのであるが、本論文はまさにその変化の内実を明らかにしようとしたものだと言える。

本論文の最も重要な研究成果は、上古から中古という千年にせまる期間における〈完了相〉〈パーフェクト相〉を担う諸形式の変遷を包括的に記述し、その内実を明らかにしたという点にある。先行研究にも、上中古間における広義の完了アスペクトを担う主要な形式の変遷を記述した研究は存在するものの、一貫した枠組みにより、〈完了相〉〈パーフェクト相〉の表現形式の変遷について、形式上の交替だけでなく機能上の変化・交替までを含めて、その内実を明らかにしたものは存在しなかった。

このような包括的な記述を可能にしたのは、詳細な共時的分析を通じて各形式の機能を明らかにした後、その機能上の特徴を手がかりに通時変化のプロセスを推定するという方法論の採用である。例えば、上古の戦国期に副詞“既”が一旦減少するものの、上古末期から中古にかけて再び増加に転ずるという一見、解釈し難い現象について、本論文は上古の“既”と中古のそれとでは、主要な機能が異なり、中古以降に増加したものは新たな用法の獲得を反映したのものであると解釈している。このような解釈は、上古・中古の“既”に対する詳細な共時的分析を行って初めて可能になるものであり、その背景には労を厭わずに膨大な用例を丹念に読み解くという申請者の姿勢があったことが窺わ

れる。また、共時的分析の結果として、個別的な言語事実を少なからず発掘していることも評価に値する。例えば、副詞“已”が中古に至ると〈完了相〉だけでなく〈パーフェクト相〉をも担うようになる現象などは、従来全く指摘されたことがなかったものである。

本論文の成果は、方法論の面でもみとめられる。例えば、上古の“矣”を分析した際、これが出来事を発生順とは逆の順序でテキスト上に提示する「逆順提示」の標識として用いられていることを指摘している。古代漢語のアスペクト表現形式に関わる議論は、ともすれば主観的な意味解釈を根拠になされる傾向があったが、アスペクト表現形式のタクシスの機能に注目して分析を行うという本論文の方法は、比較的客観的に検証できるという利点があり、方法論上の貢献をなしたものとみとめられる。

その一方、審査の過程において、いくつかの問題点も明らかになった。本論文ではアスペクトに関わる文法概念の解説・定義を行っているものの、日本語・英語を対象とした研究については必ずしも代表的ではない研究に依拠していること、個々の用例の解釈には疑義のあるものが含まれること、各種のアスペクト表現形式がどの程度文法化されているのかといった文法化の観点からの検討が不十分であるといったことである。しかしながらこれらの問題は、申請者自身も十分認識しており、今後の研究において克服し得るものであると考えられる。

なお、本論文の内容は、日本中国語学会全国大会等での口頭発表および三本の投稿論文に基づくものであり（うち二本の論文が公刊済み）、本論文の核心部分である内容は、査読付き全国学会誌に掲載済みである（『中国語学』第263号）。